

■ Culture

東京都現代美術館(江東区)で21日まで、企画展「ドローイングの可能性」が開かれている。多彩な「線」の表現は、新型コロナウイルス禍で不確かさが増した世界を、シンブルに捉え直している。

麻生三郎と仏画家アンリ・マティスの物故者2人と、ジヤンルも世代も異なる現役作家6人の絵画や彫刻などを、「言葉」「空間」「水」の三つの主題別に集める。

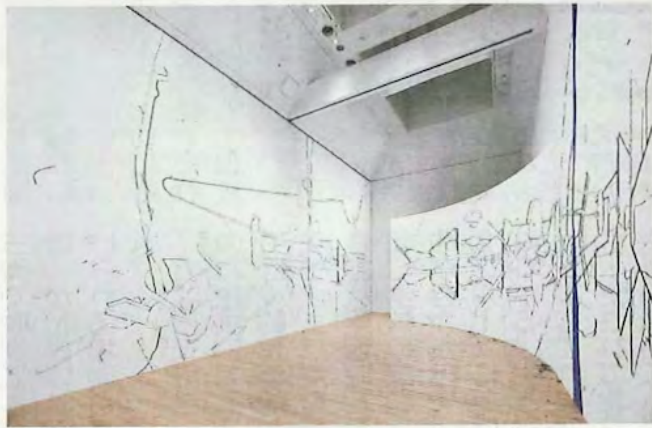
例えば「言葉」。書の石川九揚が米同時テロなど社会事件を主題にした作品は、切り刻むような墨線がツイインタワりの姿を想起させる。実は、自身の評論文の文字を驚異的に変化させている。

彫刻家の戸谷成雄は、四角い部屋の壁や床に点在させた荒々しい線刻の木彫で空間に視線を導く。盛圭太の「Bug report」も、コンピュータープログラムの欠陥(バグ)を示すような断続的な毛糸の線が、空間を囲うように壁面を走り、デジタル社会の不完全さを想起させてい

多彩な「線」未来への導線

「ドローイングの可能性」展 東京都現代美術館

盛圭太「Bug report」
2020「ドローイングの可能性」
展示風景 東京都現代美術館
Photo: Eiji Ina



「横断流水図」(2014年) 中央など、山部泰司の風景画の展示



る。草間弥生の水玉や網目の集積は無限に空間を広げる。終盤の水を巡る視点は、山部泰司の赤や青の単色で描かれた流水図や、環境計画家でもある磯辺行久が河水の航跡をうねるような線で描いたドローイングが印象的だ。

キュレーターは、1995年の同館開館から今年3月までで学芸員を務めた関直子さ

ん。「ひとの活動の多くについて、予測をすることが難しくなっているいま、線を核とする表現は、もっとも身近でしかし確実な一步を痕跡として残すことを可能とするものではないか」と、関さんは図録の論考を結ぶ。最後の仕事で、未来への導線をしっかりと引いてくれた。

(文化部 井上晋治)